

セラムック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.3

編集) 1982・3・15
発行) 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 田中寿義雄
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部字田ノ平乙
3100-1
電話 09554-3-3681
印刷所 鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市大字納富分
2919-3



そめつけろうかくさんすいす おおげち
染付楼閣山水図大鉢

館蔵資料

初期伊万里様式・山辺田窯
江戸初期（17世紀前半）
口径45.8cm、高さ12.8cm
高台径13.4cm

見込みの深い曲面を生かして高楼と背後にそびえ立つ荒々しい山水を、呉須の色も鮮かに力強く描いたこの大皿は、重厚な造りや口径の大きさに比べると高台の小さい磁器創成期に特有な器形をもつ。見込みから口縁部への立上りには、古伊万里の装飾文様へと引き継がれるぐり文（渦巻文）をめぐらし、鐙縁には如意頭文を配している。

〈史料紹介〉

皿山代官石橋三右衛門史料について(一)

石橋三右衛門は、幕末慶応4年中まで有田皿山代官を務めたひとであり、『古伊萬里』206頁掲載の文書は、慶応4辰閏4月、「異国向陶器、長崎表において売込」の事業に当たっていた商人の有田大樽町河内寿三郎へ宛てた石橋代官の手頭である。先年、杵島郡有明町深浦の石橋家に保存されている史料を拝見させて頂いた。その一部、すなわち大川内藩窯に関する部分、市ノ瀬山関係分は『鍋島藩窯とその周辺』（烏ん枕16号）に紹介したが、以下その残りを、江戸から明治への転換期における有田皿山の様相を伝える史料的価値を有するものとみて紹介したい。

I

いまわれわれのまえには中島浩氣著『肥前陶磁史考』（昭和11年刊）がある。研究の現段階からいえば無論誤りや不備な点は多いが、肥前陶磁史の、とくに有田窯業史の基礎的学習には貴重であり、一部に複製を望む聲がなお強いのも肯ける「古典」であろう。

その572頁上段以下に「維新前後の名陶家」を列挙し、そのひとりとして山本柳吉の名が見られる。すなわち、「山本柳吉——白川窯焼、明治30年7月20日卒、68歳。角物の巨器製作家にて、燈籠柳吉の名高き大燈籠の作品を遺してゐる」、と。同書628頁には明治15年頃、「肥前物の神戸貿易弥盛大」を以て「有田荷主が協同して、同地の湊川神社に磁器の大燈籠（白川の山本柳吉製）を奉献」とあり、さらに693頁には「彼は粘土を板状に伸べ之を継ぎ合せて大燈籠を製作した。曾て藩主閑叟が青花の大燈籠製作を命ずるや、自ら夫人と共に、柳吉の工場へ臨場せしことあった。又堺市住吉神社の大燈籠の如きは、長子周蔵と協力して製せしめしものにて、高さ7尺5寸の巨器に赤絵附が施されてある。云々」、と。

II

さて、石橋代官史料のひとつに、つぎのような文書下書が見られる。

口達

御内献御燈爐焼立被仰付置候皿山釜焼柳吉より別紙之通願出、惣而右燈ろふ献上之儀於其筋御取賄相成候様被仰達置候儀候得共、其筋之儀御吟味中之由二而

尚今渡方等相成候様達出候様無之、然處雇入置候細工人其外之者共反的飢渴差迫、賃銀等之儀渡候半而不相済、内分難渋、願出之次第無餘義相見候条、入具銀積書之内被相渡置候残金五百拾両丈、いつ連之筋も歟被指出候様有御座度、此段致御達候条、宜被達御吟味候、以上

卯十月

石橋三右衛門

この石橋代官の口達案にいうところの「御内献御燈爐」とは、後に史料を掲げるように鍋島閑叟が朝廷に献上するため製作させたものであった。前出『陶磁史考』に「藩主閑叟が青花の大燈籠製作を命じたというそれに当るのではなからうか。

ともあれここに指名された柳吉は、「雇入置候細工人其外」とあるように他の職人らを率いてその製作に2、3ヵ年を費したのであるが、その間「其筋」——藩当局からの財政的代償を十分には得られなかったことが、この口達案によって判る。なおこの一件の関連史料（案文断簡）によれば文中の「其筋」とは「外向」（藩の一般会計）であることが知られるが、おそらくここに言う柳吉の別紙願書も、すなわちこの口達案の要点である「入具銀積書（必要経費見積書）の内、相渡し置かれ候残金510両」支給の請求であったに違いないのである。それは当然「いずれの筋よりか」柳吉に対し支給さるべき性質のものであった。石橋代官も別史料（案文）において「御取替之形にして」、いまず「指出され候様」にと上申しているのである。

それにしても、これまでに柳吉へ渡された入具銀積書の内金額は分らないが、510両の残額とは、一燈籠の製作費としてはきわめて大きいと感じられる。それが朝廷への献上品であり、大殿様閑叟の注文であり、また製作の失敗、かつ長期間を要したせいであろうか。

III

他の史料に言う。

口達

御内献之御燈爐建方之為、有田白川山釜焼柳吉其外左之者共儀京都被差越候二付而者、往来路銀小駄賃并彼地逗留銀、扱又御所内罷出候二付而者身形等取結候半而相叶間敷、就而者右之渡方をも相整候様其

資料紹介

寛永16年銘を伴う染付碗

この資料は有田町岩谷川内にある天神山古窯跡より採集されたものである(写真1、2、図A)。2個の染付碗が重ね積みのため熔着しており、上の碗の見込に「寛永十六年三月十五日」と呉須で書かれている。この部分の写真はすでに古伊万里調査委員会編『古伊万里』(昭和38年刊)の中で、永竹威氏によって提示されている。紀年銘がこの碗の重要性を高めたことは言うまでもないが、この碗と熔着した下側の碗は外面の文様や器形が明らかなので、寛永16年(1639)における一つの基準資料となるのである。

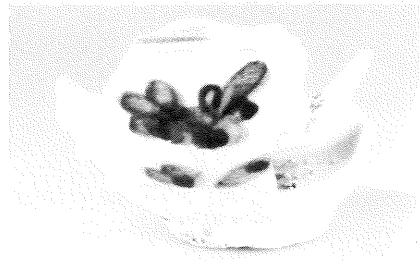
この下側の染付碗は胴部が豊かにふくらみ、口縁部下が幾分しまり気味に立上って、口縁部を形作る。器胎は比較的薄作りで、高台は断面三角形に削っている。高台内の裾には一めぐり直角の削り込みを施している。外面は口縁部に2本、胴部下半に1本の呉須描きの横線で区画し、その間に明るい青色の呉須で花卉文が生と描かれている。見込の文様は熔着しているために明らかなでないが、同様の花卉文らしい。全面にかけられた釉の透明度は少なく、ややくすんだ灰青色を呈している。

胴部に描かれた花卉文は中国・明時代の青花皿(写真3)の内側面や、壺(写真4)の肩に棹取りされて描かれた花卉文などに似通っている。明後期の碗と、この伊万里染付碗とでは高台作りなどにおいて著しく異なるが、外観の輪郭線に大きな違いはない。この花卉文碗の文様が中国のそれを直接写したかどうかは明らかなでないが、中国風のデザインを目指したものと考えてよからう。

この碗と同様の文様・器形とみてよい資料が、天狗谷E窯13室内より出土しており(写真5、図B、有田町教育委員会『有田天狗谷古窯』1972)、猿川窯の発掘では類似文様に辰砂を加えた碗が得られている(佐賀県教育委員会『有田町猿川古窯跡 第二部 発掘調査図録』1971の5頁3)。

天狗谷古窯群のうちE窯に続くA窯の廃止時は、熱残留磁気測定によって、1614/15±12年という年代が与えられている。そのためA窯の廃止期は下限を1627年と考えられている。この年代が正しければ、寛永16年(1639)のこの碗より12年あるいは20年以上も天狗谷E窯出土の碗が古いことになる。この年代については今云々できないが、紹介資料は少なくとも寛永16年にこの文様・器形の碗が焼かれていたことを示している。

(大橋康二)



1. 染付花卉文碗



3. 明青花喜怒封侯図皿
(傳揚編『明代民間青花瓷器』69による)



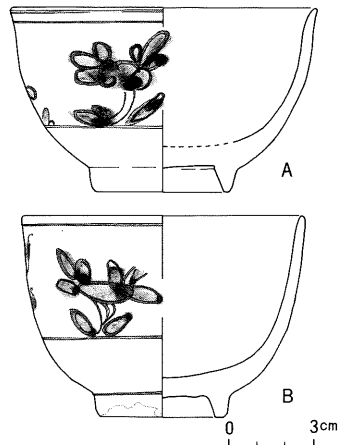
2. 同上内面



4. 明青花花鳥文壺
(同上 15による)



5. 染付花卉文碗
(天狗谷E窯13室出土 有田町教育委員会)



A 天神山窯採集品(写真1)

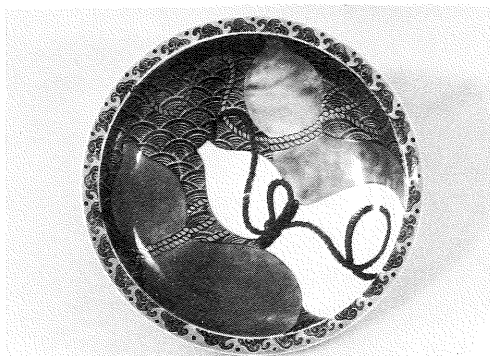
B 天狗谷E窯13室出土品(写真5)

シリーズ

やきものに見る文様(3)

せいはいは
青海波文様

同心の半円形を互い違いに重ねて波や鱗状の文様をあらわしたもの。「せいはいは」ともいう。中国では「水波紋」といって漢時代の瓦當磚や銅鏡にみえる。7世紀の作とみられる群馬県伊勢崎市横見出土の埴輪で正装した女性像の衣の胸から腰にかけて波文を陰刻している。叩きの技法で成形した須恵器の大甕の内側には青海波状に当木の痕跡が残っている。舞楽の曲名に「青海波」というのがあり、これに用いる衣装には波に千鳥の文様をつけるのがきまりで、この文様の名



色鍋島三瓢文皿

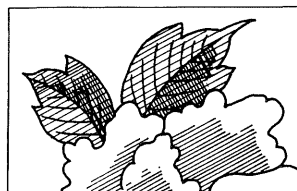
称はこの曲名に由来すると考えられる。『源氏物語』紅葉賀には「源氏の中將はせいはいはをぞ舞ひ給ひける」とある。『枕草子』に「裳は、大海」といっており平安時代には既によく知られた文様である。鎌倉・南北朝時代には古瀬戸魚文瓶子の背景地文として彫り込まれ、同じ頃、中国元時代の青花龍文双耳瓶や青磁貼花雲龍文盤などに地文としてみることができ。近世以降は初期伊万里、鍋島、古九谷の背景地文としてよく用いられ、器面を美しく装飾した。(吉永陽三)

シリーズ

やきもの小辞典(3)

印版③——銅版絵付け

陶磁器用絵具を用いて銅版印刷し、紙に刷られた文様を器面に転写する絵付けを、銅版絵付けという。この名称から、銅版を直接器面にあてて絵付けをすると

(左) 染付銅版手
牡丹蝶文鉢(下) 同上
部分説明図

思いがちだが、銅版によって印刷するのは紙の方で、器面へはその紙をあてて転写絵付けする。したがって銅版転写法ともよばれる。この技法は、上絵付けと下絵付け(染付)の両方があるが、一般には後者をさす場合が多い。

銅版絵付けは、(1)銅板彫刻(2)印刷(3)転写の3段階からなる。(1)はロウで被膜した銅板に鉄筆で文様を描き酸で腐蝕する、いわゆるエッチングの手法による。この場合、文様の濃淡がすべて斜線で表わされることに特色がある。(2)の印刷は、陶磁器用絵具に粘質の草根やグリセリンなどを混ぜて行なう。(3)の転写は、「うつし絵」の要領と同じである。印刷面の文様側を素焼きした素地にあて、紙の裏面に湿気を与えて軽くこすり、紙をはがして絵具が素地側に付着すれば絵付けが完了したことになる。

銅版転写による製品は日用雑器がほとんどで、一般家庭にその伝世品がしばしば見うけられる。写真の染付鉢は、伊万里市の旧家で使われていたものである。産地や年代など未詳だが、肥前地区で明治後期が大正時代に作られたものであろう。この鉢の文様にも、銅版の特色がいくつかみられる。たとえば手がきのダミにあたる陰影はすべて細い平行線で表わされ(説明図参照)、牡丹花の下方には転写紙の重なりを示唆する部分が見いだされる。

日本での銅版絵付けは、19世紀半ばに瀬戸・美濃地方で試みられたが、いずれも量産の特質を生かすまでに至らず、短期間で終っている。しかし明治中期に再興し、技術的にも改良されたため、型紙絵付けにかわる量産むき技法として各地の磁器窯で流行した。

(鈴田由紀夫)

入館者数(56.7.1～57.1.31)

()内数字は特別
企画展入館者数

区 分	人 数	利用率	左の内訳	人 数
個 人	22,085 (6,562)	52.4	小・中学生 高校・学生 一 般	1,075 674 20,336
団 体	17,062 (4,812)	40.5	小・中学生 高校・学生 一 般	2,133 1,641 13,288
その他	2,982 (1,537)	7.1	特別入館者	2,982
合 計	42,129 (12,911)	100.0	計	42,129

陶磁資料寄贈者芳名

(敬称略) (56.8.1～57.1.31)

九州陶磁文化館へ資料をご寄贈くださいますとあり
がとうございました。資料台帳に芳名を記し、永く
保存いたします。今後とも、なお一層のご協力をお
願い申し上げます。

小橋 一朗 埼 玉 県 白磁輪花型打皿1点、染付網
目文碗1点、瑠璃地菊水文型
打小皿2点
河本 正年 熊 本 県 肥後一勝地焼陶片49片
満武 初一 伊万里市 白磁煎茶器(出石盈進社造)
一揃7点
塩谷 信一 福 岡 県 長崎龜山焼染付奉納花生(天
保三年銘)1点
笹倉 一男 福 岡 県 錆釉型打瓢箪文輪花皿1点
角 功博 長 崎 県 染付雲閣文皿1点、染付花卉

文台皿1点、染付桜花文小碗
2点、染付鳳凰文皿1点、染
付唐子文鉢1点

迎 鉄夫 有 田 町 天神森古窯陶片 129片

日誌より

- 56.7.21 「田中太郎・優紀子作品展」(～8.2)
56.7.22 久留米市の豊田コレクション調査に協力(～
7.26、吉永)
56.8.28 陶芸教室第1回本窯焼成
56.9.1 「真葛香山作品展」(～9.25)
56.9.8 酒井田柿右衛門家伝来の土型調査始まる
56.9.27 茶室開き、「^{せっせん}磔泉庵」と命名
56.10.18 入館者数延10万人達成
56.10.31 企画展「世界の現代陶芸展」(～12.6)
56.11.3 公開座談会「世界の現代陶芸について」
56.11.30 北九州市における遺跡出土陶磁の整理に協
力(～12.1 大橋)
56.12.10 常設展始まる
57.1.7 久留米市梅林寺の所蔵品調査に協力(～1.
9 吉永)
57.1.9 有田町樋口古窯物原の発掘調査に協力(～
1.14 大橋)
57.1.27 久留米市梅林寺の所蔵品調査に協力(～1.
29 吉永)
57.1.28 「エンツォ・マーリ、磁器の美」展(～2.
14)

行事予定

- 57.3.13 宋元里陶芸展(～3.22)
57.4 窯^{くわ}有^{あり}作陶展
57.4 有田町長吉谷古窯出土品展
57.4.29 九州山口陶磁展(～5.17)
57.6 中島 均遺作展
57.6 現代工芸会展
57.7.11 色鍋島展(～8.1)

利用案内

開 館 午前9時～午後4時30分 月曜休館
年末年始休館 12月28日～1月4日
観覧料 一般150円(100円)／大学・高校生100円(70円)／
中・小学生50円(30円)／()内は20人以上の団体料
金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定
めます。
文 通 佐世保線有田駅下車徒歩15分

